

第九七回 明治大学中央図書館ギャラリー展示

「江戸文藝文庫」展

― 寛書開始二〇周年記念 ―

会期 二〇二六年一月一六日(金)～三月二九日(日)

休館 一月五日(木)、八日(日)、一五日(日)、

二二日(日)、二七日(金)、三月一三日(金)

会場 明治大学中央図書館一階ギャラリー(入場無料)

〒100-1183 東京都千代田区神田駿河台1-1

03-3131-9614 2500

時間 図書館の開館時間中にご観覧いただけます。

<https://www.meiji.ac.jp/library/>

主催 江戸文藝文庫選定分科会・明治大学図書館

明治大学図書館

第97回 明治大学中央図書館ギャラリー展示

「江戸文藝文庫」展

— 蒐書開始20周年記念 —

明治大学中央図書館の特別文庫「江戸文藝文庫」に、江戸文藝文庫選定委員会(後に選定分科会に名称変更)が設置され、蒐書活動を開始したのは2005年度からのことでした。今年度はその20周年に当たります。本文庫創設の契機は、文学部教授水野稔先生(1911-1997)の没後、その旧蔵和書約800タイトル2,000冊弱を本学図書館が一括購入したことでした。先生の御遺族と図書館を仲介下さったのは、後に図書館館長を務められた文学部名誉教授原道生先生(1936-2023)でした。改めて両先生の御功績をお慰み申し上げます。

元来、本学図書館は江戸戯作関係の蔵書に富んでいましたが、それらも順次「江戸文藝文庫」に配置換えされ、現在、総タイトル約3,000、総冊約7,000冊という、日本屈指の江戸戯作文芸のコレクションとなっています。そのうち、2005年度の選定委員会発足後に今日まで収蔵した作品は160点ほどとなります。20年の歩みとしては遅々たるものかもしれませんが、着実に文庫の充実を図ってきたものと自負しております。

これまで、「江戸文藝文庫」所蔵品は、中央図書館企画展示の第28回「《江戸文藝文庫》展一戯作の諸相一」(2008/10/17-11/18、12/18-2009/1/31)、第77回「《江戸文藝文庫》展一水野稔先生の学徳を偲んで一」(2018/6/1-7/11)、と2回に渡って公開展示してきました。

以上の展示では、明治大学図書館の従来在所蔵作品および水野稔先生旧蔵書を中心として展示しましたが、第3回になる今回は、江戸文藝文庫選定委員会設置の2005年度以降に収蔵された作品を展示します。

近年、江戸時代の古書価も次第に高騰し、大学の緊縮財政の影響もあって、蒐書活動はなかなか思うに任せませんが、そのような中でも選定委員会は最善を尽くしてきたつもりであります。ギャラリーを訪れた方々が江戸戯作文芸への興味を抱かれ、また、研究を志す方々が「江戸文藝文庫」を御活用下さればこれに勝る喜びはありません。

江戸文藝文庫選定分科会

座長 内村 和至(文学部教授)

展示品リスト

No	分野	書名	図書番号
1	掛軸	石場図	099.4/137//H
2	掛軸	隠蓑笠図	099.4/139//H
3	自筆稿本	白縫譚 第17編上	913.57/RY3-6//H
4	写本	戯作六家撰	913.5/141//H
5	絵本	絵本寶七種	913.53/SA1-7//H
6	役者絵本	夏乃富士	913.57/SA2-19//H
7	双六	犬のさうし鶯梅雙六	798/12//H
8	双六	草紙合高評雙六	798/11//H
9	双六	馬琴著作當雙六	798/15//H
10	洒落本	雅仏小夜嵐	913.53/S01-1//H
11	洒落本	北廓内所図会	913.55/K02-1//H
12	洒落本	吉原大全	913.53/K01-1//H
13	細見	吉原細見12種	384.9/64//H 384.9/74//H 384.9/63//H
14	人情本	人情腹之巻	913.54/HA1-8//H
15	人情本	朧気物語 後編	913.53/HA1-2//H
16	人情本	人間万事／心意気	913.54/HA1-7//H
17	黒本・青本	大盃四天王星兜	913.57/72//H
18	黒本・青本	恋福引	913.57/76//H
19	黒本・青本	新版信玄一代記	913.57/79//H
20	黄表紙	清盛一代記	913.57/K01-1//H
21	黄表紙	新田義貞一代記	913.57/NA1-8//H
22	黄表紙	帰咲後日花	913.57/SA1-85//H
23	黄表紙	廬生夢魂其前日	913.57/SA1-77//H
24	黄表紙	這奇的見勢物語	913.57/SA1-79//H
25	黄表紙	浪速秤華兄芬輪	913.57/TA1-64//H
26	黄表紙	虚空太郎武者修行咄・虚空太郎舎弟讐討	913.57/NA1-9//H
27	黄表紙	酬寇播州皿屋敷	913.57/TO2-1//H
28	黄表紙	敵討蟒蛇榎	913.57/NA1-5//H
29	合巻	驛路鈴與作春駒	913.57/TA1-69//H
30	合巻	伊達模様紅葉打懸	913.57/HA2-2//H
31	合巻	草履打所縁色場	913.57/SA1-82//H
32	合巻	花盛雛献立	913.57/K02-1//H
33	合巻	八幡太郎一代記	913.57/68//H
34	合巻	桃花流水	913.57/IK1-1//H
35	合巻	鶯塚梅の魁	913.57/SH9-2//H
36	明治期戯作	澤村田之助曙草紙	913.6/OK1-3//H
37	明治期戯作	荒磯割烹鯉魚腸	913.6/KU1-1//H
38	明治期戯作	霜夜鐘十時辻筈	913.6/TA1-1//H
39	明治期戯作	昇平鼓腹三府膝栗毛	913.6/MA1-1//H
40	明治期戯作	民権泰斗／板垣君近世紀聞	913.6/NA1-1//H
41	読本	しみのすみか物語	913.56/IS1-2//H
42	読本	情花奇語奴の小まん	913.57/RY1-55//H
43	読本	松染情史秋七草	913.57/TA1-58//H
44	読本	善悪因果経和談図会	913.54/SH1-5//H
45	滑稽本	得手勝手	913.55/NA1-1//H
46	滑稽本	人遠茶懸物	913.53/SH3-1//H
47	滑稽本	無如在怪談	913.55/G02-1//H

「江戸文藝文庫」の蒐書方針

「江戸文藝文庫」は、江戸後期戯作を主たる蒐書対象としている。「江戸文藝文庫」設置のきっかけとなった水野稔先生の旧蔵書が、先生の研究対象だった江戸後期戯作のコレクションだったからである。先生は自著『江戸小説論叢』（中央公論新社 1974/11）のあとがきで、「京伝と馬琴をまずとりあげて、それを中軸としてその前後左右への広がりを考えようとするのが、わたくしの江戸小説研究の構想であった」と書かれている。「江戸文藝文庫」は、この構想を受け継いで、蒐書活動を行ってきた。その意味で、まずはじめに山東京伝と曲亭馬琴の略歴を振り返っておくこととしたい。



04『戯作六家撰』より

山東京伝(さんとうきょうでん 1761-1816)は、本名岩瀬醒(いわせ さむる)、通称伝蔵(でんぞう)。弟に戯作者の山東京山(まきのぶ)がいる。浮世絵師北尾重政に学び、18歳で黄表紙の画工北尾政演として出発し、天明2(1782)年刊の自画作黄表紙『御存知 商売物』(ごぞんじのしょうばいもの)が激賞され、天明5(1785)年の『江戸生 艶気樺焼』(えどうまれうわきのかばやき)で評価を不動のものとした。同年、洒落本の初作『令子洞房』(むすこべや)を刊行し、以後『通言総離』(つうげんそうまがき) (天明7年<1787>)、『傾城買四十八手』(寛政2年<1790>)などの名作を著して、黄表紙・洒落本の代表的作者となった。京伝の作品は、温かな人間性に裏付けられながら、細密な心理描写や洗練された機知に富み、成熟しきった江戸の都市文化の極致を示している。しかし、こうした作風も、寛政改革で咎めを受け、以後、京伝は作風の転換を余儀なくされた。寛政5(1793)年33歳、煙草入れ店の商人京屋伝蔵となり、文化元(1804)年ごろからは読本・合巻の製作を主とするようになった。読本の代表作には『忠臣水滸伝』(ちゅうしんすいこでん 寛政11-享和元年<1799-1801>)、『桜姫全伝 曙草紙』(おうけ姫のぞうし 文化2年<1805>)、『昔話 稲妻表紙』(むかしがたり 文化3年<1806>)などがある。また、近世初期の風俗考証に興味を持ち、『近世奇跡考』(文化元年<1804>)を手始めに、晩年は『骨董集』(文化11・12年<1814・15>)を出すなど、考証随筆に力を注いだ。

曲亭馬琴(きよくていばきん 1767-1848)は、本名滝沢興邦(おきくに)、後に解(とく)。旗本松平信成の用人滝沢興義の五男として生まれ、9歳で父を亡くし、家督を継いだ長兄も松平家を去って、10歳で家督を継ぐこととなった。しかし、仕えた主君の孫・八十五郎の性格に耐えかね、14歳の時に松平家を出た。当初は俳諧に親しみ、青年時代は放蕩無頼の生活を送った。24歳の時に山東京伝に出入りするようになり、寛政3(1791)年に「京伝門人大栄山人」名義で黄表紙『尽用而二分狂言』(つかいはたして)を刊行し、戯作者として出発した。翌年、板元蔦屋重三郎に手代として雇われ、翌々年27歳で履物商「伊勢屋」の未亡人・会田百の婿となり、滝沢清右衛門を名のった。寛政8(1796)年、30歳の時に出した中型読本『高尾船字文』を皮切りに、次第に読本や合巻に本領を発揮することになり、以後、晩年まで旺盛な作家活動を展開した。馬琴は原稿料のみで生活した日本最初の職業作家である。馬琴の作品数は膨大だが、主たる著作の読本は40種に及び、その代表作としては『椿説弓張月』全5編29冊(1807-1811)、『南総里見八犬伝』全98巻106冊(1814-1842)がよく知られている。特に後者は28年を掛けて完成された畢生の大作であり、『水滸伝』の日本化を目指した読本の到達点と言える作品である。



04『戯作六家撰』より

自筆資料・写本・絵本など

このコーナーでは、「江戸文藝文庫」の幅広い収集を示すため、掛け軸や自筆本・写本・絵本・双六など様々な作品を展示した。

山東京伝(1761-1816)の掛け軸01「石場図」、02「隠蓑笠図」は、水野稔先生の御遺族から寄贈された資料の一部である。先生は東京帝国大学の卒業論文以来、終生山東京伝の研究に携わってこられた。先生を編集主幹とする『山東京伝全集』全20巻・別巻1巻(ぺりかん社)は30数年を掛けて、ついに昨2024年に完結した。泉下の先生も安堵しておられるだろう。

03は柳下亭種員(1807-1858)の『白縫譚』第17編上の自筆稿本。種員は、柳亭種彦の門人で、『白縫譚』のほかに、長編合巻『児雷也豪傑譚』43編172巻の12-36編も書いている。

04は、四方梅彦(1822-1890)が写した写本である。梅彦も柳亭種彦の門人。銘酒「四方」を販売する店の3代目だったが、戯作、錦絵、歌舞伎の世界に入り浸った江戸通人の生き残りの人物である。

05は京伝の絵本で、縁の深い書肆である蔦屋重三郎(1750-1797)に頼まれて序文を寄せたもの。06は京伝の弟、山東京山(1769-1858)が関わった役者絵本である。もちろん、本書の眼目は、この頃が全盛時とも言える歌川国貞(3世歌川豊国：1786-1865)の手になる役者絵である。

07-09は、曲亭馬琴(1767-1848)の著作を元にした明治期の双六3種。近代文学は馬琴の乗り越えから始まったと言えるが、明治期になってもその人気は衰えていなかったことがわかる。

01. 掛軸『石場図』^{いしばず} 山東京伝(1761-1816)自画 1幅 制作年不明 099.4/137//H

江戸後期を代表する戯作者、山東京伝の自筆掛け軸である。画賛「両々石場旧与新／舟頭欲繫翠楼春／女兒解得棧橋滑／近照毬燈護粹人／梅塢逸民 京伝画 印[巴山人]」。石場は深川の遊里で、「旧与新」というように新旧二つがあった。石場が岡場所として繁昌するのは天明期(1781-1789)で、京伝の洒落本『古契三娼』(天明7年刊〈1787〉)に、その流行ぶりが語られている。その頃の作品であろう。

02. 掛軸『隠蓑笠図』^{かくれみのがさず} 山東京伝(1761-1816)自画 1幅 享和2(1802)年作 099.4/139//H

年記「享和壬戌」は享和2年(1802)、京伝42歳。その卯月(陰暦4月)のある日、雨に降られて宝来亭に雨宿りをしたところ、主が雨具を貸してくれた。その礼に送った戯画を軸に仕立てたもの。画賛「一日宝来亭に／雨のはれ間を／まちぬるに／ますゝやまさり／ければ／あるしの情ふかく／雨具かしあたへて／帰らしむ／つくる日／これにむくゆる／とて／よみて／おくり侍る たから来る／家のまことは／蓑笠に／かくれ／こさらぬゝゝゝ 享和壬戌卯月 山東京伝 印[巴山人] 印[京伝／醒州■■〈居士?〉]」。



02.「隠蓑笠図」

03. 自筆稿本『白縫譚』^{しらぬいものがたり} 第17編上巻 柳下亭種員(1807-1858)筆 1冊 制作年不明 913.57/Ry3-6//H

『白縫譚』全90編は嘉永2(1849)年から明治18(1885)年の長きに渡って刊行された長編合巻の雄編である。柳下亭種員は初編から34編(30-34編は遺稿編集)までを書いた。その種員による『白縫譚』

第17編上巻の自筆草稿本である。刊本は嘉永7(1854)年の刊行なので、合巻の制作手順から考えれば、草稿時期は刊行時期と離れてはいないだろう。当該刊本も比較のため展示した。見るとおり、刊本の画工、2世歌川国貞(1823-1880)も画面の構成などほとんど作者の指示に従っている。現在、長大な全編は佐藤至子編『白縫譚』(国書刊行会 2006/5/23)で見ることができる。

04. 写本『^{げさくろつかせん}戯作六家撰』 岩本活東子(生没未詳)編遍／四方梅彦(1822-1890)写 1冊 明治13(1880)年写 913.5/141//H

写年は明治13(1880)年4月20日(識語)。原本は『燕石十種』に収録され、よく知られた本であるが、写本の数自体は少ない。これは活東子の本を谷文晁(1763-1841)門下の野村文紹(1816-?)が明治13年3月に写し、それをまたすぐに四方梅彦が借覧して再転写したもので、日本画家川崎千虎(1837-1902)の旧蔵本である。書誌・内容の詳細は、内村和至「写本『戯作六家撰』について」(『図書の譜』15 2011/8)に紹介されている。

05. 絵本『^{えほんたからなくさ}絵本寶七種』 山東京伝(1761-1816)作 1冊 享和4(1804)年刊 蔦屋重三郎板 913.53/SA1-7//H

京伝の序文に、「元旦に板元蔦屋重三郎がやってきて、めでたいこの本に序文を書けと言うので書いた」とある。正月の七草に因んで七種の福神を描いた彩色刷りの絵本である。その七図は、①大黒・福祿寿・笑子、②安蕪宮神職友就・高砂之尉姫、③桃太郎、④武内宿禰、⑤郭子儀、⑥彭祖、⑦東方朔・漢武帝・西王母。⑤郭子儀は中国唐代の名将なので、ここにはやや不釣り合いな気がしないでもなく、7人の選定基準が曖昧な感じはする。絵師は不明だが、画風から判断したのだろう、本書の表紙には後人の筆で「北尾重政画」とある。また、国立国会図書館本にも同様に「重政筆」という書き込みがある。真偽不明ながら、北尾重政(1739-1820)は京伝の師匠であり、蔦屋とは長い付き合いがあったから、その可能性は高い。



05. 『絵本寶七種』



06. 『夏乃富士』

06. 役者絵本『^{なつのふじ}夏乃富士』 山東京山(1769-1858)作／歌川国貞(1786-1865)画 2冊 文政10(1827)年序 913.57/SA2-19//H

本作の先蹤は、安永9(1780)年序の市場通笑(1737-1812)作／勝川春章(1726?-1792)画の役者絵本『役者夏の富士』である。雪を被らない「夏の富士」を化粧を落とした役者に喩えたもので、役者の素顔を描いて好評を博した。それから50年ほどの後の本作は、角書きを「三賀之津役者素顔」と言い、発想も題名もそのまま踏襲している。その差違は、本作は彩色刷りでより華美になっていることである。本の後半部は登場した役者の簡単な経歴が紹介してある。

07. 双六『犬のさうしおうばいすごろく驚梅雙六』 二代歌川国貞(1823-1880)画 1舗 嘉永5(1852)年 蔦屋吉蔵板 798/12//H

この双六は曲亭馬琴(1767-1848)の代表作『南総里見八犬伝』の登場人物55人をコマ割にしたもので、振り出しが里見義実で、上がりは『八犬伝』中の最もよく知られた「芳流閣」の場面となっている。それぞれの人物を役者似顔で描いているが、そこには物故した名優も多く含まれている。内題『八犬伝いぬの そうし』は、笠亭仙果作『雪梅芳譚犬の草紙』に因んだものである。馬琴の『八犬伝』は、あまりにも長編に過ぎるため、いくつもの抄録合巻が出回った。その中でも、仙果の『犬の草紙』は特に読まれた作である。



07. 『犬のさうし驚梅雙六』



08. 『草紙合高評雙六』

08. 双六『草紙合高評雙六』 梅素亭玄魚(1817-1880)筆／三世歌川豊国(1786-1864)画 1枚 安政2(1855)年 若狭屋与市板 798/11//H

この双六は、『犬の草紙』『時代加々見』など当時の合巻の登場人物を配した双六で、目で見ると人気合巻一覽となっており、安政頃の人々の嗜好が如実に窺える。筆者の梅素亭玄魚は、通称宮城喜三郎、主に筆耕を生業としていた。絵は独学だったが、安政頃から合巻や錦絵の袋絵や目録図、千社札や摺物の図などを多作し、「びら画の名人」と言われた。図案家という職業が存在しない時代の図案家だったと言えるだろう。また、仮名垣魯文の「粋狂連」の一員で、芝居の見巧者「六二連」の幹事も務めている。明治13(1880)年に64歳で没している。言わば、江戸の通人・遊び人の最後の生き残りのような人物である。

09. 双六『馬琴著作當雙六』 楊洲周延(1838-1912)筆 1枚 明治23(1890)年 森本順三郎板 798/15//H



09. 『馬琴著作當雙六』

曲亭馬琴の当たり作18種を双六にしたもので、明治23(1890)年当時、馬琴の著作がどのように受け止められていたのか、その一端を示す資料と言えよう。周延の絵からは馬琴の作品らしい雰囲気は感じられず、やはり明治時代の空気が濃厚である。周延は、当初は歌川国芳(1798-1861)に師事し、その後、3世歌川豊国(1786-1864)、次いで豊原国周(1835-1900)の門人となった。浮世絵師として本格的に活動するようになるのは明治8(1875)年頃からで、美人画を始め役者絵・歴史画・戦争絵・開化風俗絵・宮廷絵など幅広く描き、明治時代とともに生きて、大正元(1912)年に亡くなった。

洒落本・人情本

「洒落本」は、浮世草子の好色本に代って興った遊里文学で、延享・宝暦頃(1744-1763)に始まり、安永・天明頃(1772-1788)を頂点として、文政頃(1818-1829)まで、主として江戸で出版された。半紙四つ切数10枚以内という書冊の形から、小本とも蒔蕨本とも呼ばれた。洒落は「滑稽」と「通」とを意味し、会話を主として地の文を交え、精細な写實的描写で遊里の情景風俗や種々の人物の言動を写す小説的構成のものを主流とするが、他に遊里案内書・遊客心得・遊里風俗誌・遊里比較論等、種々雑多なものも含まれる。

「洒落本」は、遊里細見、評判記類を漢文で戯文化したところに始まり、上方の献笑閣主人が延享3(1746)年の『月花余情』で会話体を創始し、宝暦7(1757)年の『聖遊郭』が滑稽を前面化し、さらに江戸の多田翁が明和7(1770)年の『遊子方言』で会話体小説としての定型を確立した。

以後、山手馬鹿人(蜀山人、1749-1823)の『深川新話』『世説新語茶』『道中粹語録』等における岡場所描写の軽快なユーモア、田螺金魚(生没未詳)の『妓者呼子鳥』『契情買虎の巻』等の人情描写、蓬莱山人帰橋(生没未詳)の『富賀川拝見』『美地之蠣殻』等に見る深川の情調や気質の描写、唐来三和(1749-1810)の『和唐珍解』の奇想天外な滑稽など、多彩な作品が展開されていった。

その中で、「洒落本」のあらゆる要素を融合させた作者が山東京伝(1761-1816)である。『通言総籙』の精妙な写実や『傾城買四十八手』の心理描写は、「洒落本」における文学的達成を示している。しかし、寛政3(1791)年の禁制によって遊里文学である「洒落本」の状況は一転し、梅暮里谷峨(1750-1821)は『傾城買二筋道』等で人情描写に特化し、その傾向に十返舎一九(1765-1831)の『廓意気地』等が拍車をかけ、「洒落本」は「人情本」へ転化の路を辿っていった。

人情本の第一人者、為永春水(1790-1844)が二世南仙笑楚満人の名で『明烏後正夢』初編を出版したのが文政4(1821)年である。春水は「為永連」と言われる助作者・代作者を動員して作をなし、これが松亭金水(1797-1863)のような幕末期戯作者を生む母体ともなった。

春水は、天保3(1832)年に代表作となる『春色梅児誉美』初・2編を刊行し、「人情本」は天保年間(1830-1844)に全盛期を迎える。しかし、天保13(1842)年、天保の改革によって手鎖50日の刑を受けた春水は、翌年、憂悶の中に没した。その後も「人情本」は鼻山人(1791-1858)や松亭金水などによって書き継がれるが、明治期になって消滅する。文学史的に見れば、会話中心の構成だった「洒落本」に対し、社会や風俗の写實的描写に心理描写を加えた「人情本」は、手法的には近代小説を準備するものだったと言える。

10. 洒落本『雅仏小夜嵐』 蘇生禪師(生没未詳)関 1冊 坐禪窟蔵 明和(1764-1772)頃 913.53/S01-1//H

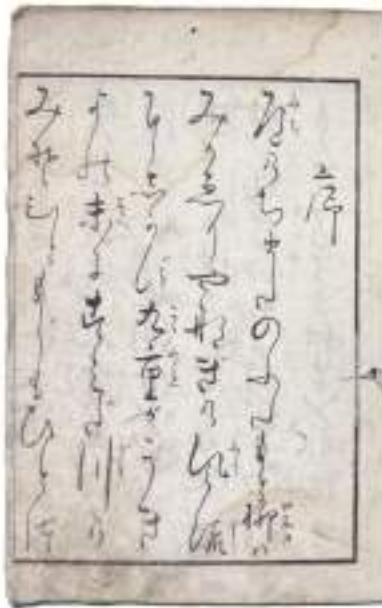
本作は明和年間(1764-1772)の成立と考えられている。この時期の洒落本では作者や蔵板者の正体を隠すのはままあることで、蘇生禪師・坐禪窟は未詳である。作者蘇生禪師については、元本法学部教授徳田武先生は、「『雅仏小夜嵐』も上田秋成作ならん」(『國語と國文學』通巻1128号 2017/11)との説をなしている。まだ異論百出の状態だが、問題提起として興味深い。

11. 洒落本『北廓内所図会』 小金厚丸(生没未詳)作 天明6(1786)年刊 1冊 913.55/K02-1//H

12. 洒落本『吉原大全』 小金厚丸(生没未詳)作 天明6(1786)年刊 1冊 913.53/K01-1//H



11. 『北廓内所図会』序



12. 『吉原大全』自序

る。異版の実態は複雑に入り乱れているが、『洒落本大成』第9巻(中央公論社)解説に拠れば、11『北廓内所図会』は第3種本の跋文を削除した異本とおぼしく、12『吉原大全』は第4種本と見られる。

11『北廓内所図会』と12『吉原大全』は、それぞれ原作を改竄した別個の版である。元々の作は、安永9(1780)年自序の南陀加紫蘭^{なんだかしらん}作／北尾政演^{きたおのり}画『古今青楼／咄の絵有多』である。南陀加紫蘭は絵師窪俊満^{くぼしゅんまん}(1757-1820)が戯作に用いた号で、俊満は京伝と同じ北尾重政(1739-1820)の門下である。本書は、『咄の絵有多』刊行の六年後に当たる天明6年(1786)に、これを改竄増補して刊行したもので、作者の小金厚丸は「黄(小)金集まる」の語呂合わせ。天明6(1786)年の本作がその名の初出らしく、以後、享和初年頃(1801-)まで本作を含めて洒落本のみ8作ほど作っている。

13. 細見^{よしわらさいけん}『吉原細見』12種 384. 9/64//H-384. 9/74//H、384. 9/63//H



13. 『吉原細見』①刊記

『吉原細見』は吉原のガイドブックである。遊里や遊女は、現在から見て芳しくない存在にしても、江戸の文芸や芝居の中では重要な舞台であり登場人物であった。それをことさらに美化するつもりはないが、江戸文化の不可欠な要素だったことは確かである。展示品12種の刊年は、それぞれ、①文化12(1815)年春、②文政8(1825)年秋、③弘化3(1846)年、④同5(1848)年、⑤-⑨嘉永3-7(1850-1854)年、⑩文久元(1861)年、⑪同3(1863)年、⑫明治期、である。板元だけ示せば、①②は葛屋重三郎、③④は山下屋、⑤-⑪は玉屋、⑫は不明である。

14. 人情本^{にんじょうはらの まき}『人情腹之巻』鼻山人(1791-1858)作 6冊 文政12(1829)年刊 913. 54/HA1-8//H

15. 人情本^{おぼろげものがたり}『朧気物語 後編』^{こうへん}鼻山人(1791-1858)作／貞斎泉晃(1812-?)画 3冊 天保5(1834)年刊 玉野屋新右衛門他板 913. 53/HA1-2//H

16. 人情本^{にんげんばんじ}『人間万事／心意気』^{こころいき}鼻山人(1791-1858)作／米花斎英之(生没未詳)画 第4編3冊 刊年不明 913. 54/HA1-7//H

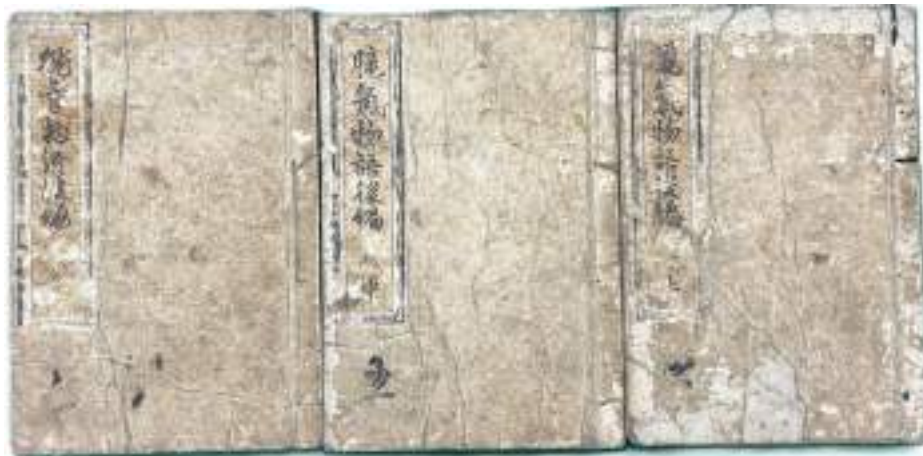
14『人情腹之巻』、15『朧気物語 後編』、16『人間万事／心意気』は、3作とも鼻山人^{はなさんじん}作の人情本である。鼻山人は合巻や狂歌では東里山人とも号した。もとは幕府の与力で、後に戯作者となった。文化4(1807)年刊の合巻を初作に合巻・滑稽本・読本などをものし、文政期(1818-30)には人情本作者として活躍し、40種ほどの作をなした。ただ、その人気は、人情本の第1人者、1世為永春水(1790-1844)には遠く及ばなかった。

14は意外に残存数が少なく、刊本の所蔵館は2件ほどである。15の前編は文政12(1829)年刊で画工は溪斎英泉(1791-1848)。本書はその後編で、画工の貞斎泉晁は英泉の門人である。その作画期は文政から弘化(1818-1845)にかけての約30年ほどである。

16の初板は、初編3冊が天保4(1833)年刊、第2-4編9冊が同5(1834)年刊で、本書はその第4編3冊である。人情本は何度も刷られるので、後刷りの様相を把握するのは極めて難しいが、基本的に安価で粗悪な染料を用いた題簽の簡易な装幀で、版面の刷りが甘ければ後のものである。



14. 『人情腹之巻』



15. 『朧気物語 後編』



16. 『人間万事／心意氣』

草双紙

—赤本、黒本・青本、黄表紙、合巻—

草双紙くさざうしは江戸時代に行われた絵入り本の総称で、文学史上の展開により、「赤本」、「黒本・青本」、「黄表紙」、「合巻」に区分される。体裁は、縦横が約18×13cm程度の「中本」サイズで、5丁(10頁)を1冊とし毎丁に挿絵があり、その余白に平仮名本文を記すスタイルである。この5丁1冊の形式は後々まで保たれた。

「赤本」は寛文期(1661-1673)に始まり、元禄-享保期(1688-1736)に盛んとなり、寛延頃(1748-1751)まで行われた。表紙が赤色だったため「赤本」と呼ばれた。題材は主として子供向けの御伽草子や昔話に取材している。それが延享年間(1744-1748)に入ると、浄瑠璃・英雄一代記・化物話などを題材にした作品も行われはじめ、それに伴って装幀も黒や青の表紙となり「黒本・青本」と呼ばれるようになった。「黒本・青本」の先後関係についてはまだ決定的な結論は出ていないが、その濫觴は延享元(1744)年刊『丹波爺打栗』たんばのてうちぐりとされている。

「黒本・青本」の初期作品は鳥居派きよますの清倍・清重などの絵師が制作に当たり、安永期(1772-81)には富川房信が活躍した。後には観水堂丈阿・柳川桂子けいし・和祥などの作者も現れた。宝暦頃(1751-64)からは創作意識が進み、現実性も増して、明和(1764-72)末には滑稽や洒落などの要素が拡大し始めた。

その傾向を決定づけたのが、恋川春町(1744-1789)の安永4(1775)年刊『金々先生栄花夢』である。これは遊里を題材とする内容と当世的風の画風で、これによって「黒本・青本」は大人向けの作品となった。この作品以降を文学史的には「黄表紙」と呼ぶ。この時期の作者には春町の友人、朋誠堂喜三二(1735-1813)がいる。黄表紙作者の中でも特筆すべきは山東京伝(1761-1816)である。京伝は天明5(1785)年の『江戸生艶気樺焼』えど生まれうわきのかばやきでその評価を不動のものとした。この頃から天明末年(1789)に掛けては、他にも唐来参和(1744-1810)、芝全交(1750-1793)、志水燕十(1726-1786)、岸田杜芳(生没未詳)、市場通笑(1737-1812)などが活躍し、黄表紙の全盛期を築いた。

しかし、寛政改革によって黄表紙は作風の変更を余儀なくされ、京伝も教訓を趣向とする作品を作り出していったが、寛政7(1795)年に刊行された南仙笑楚満人(1世：1749-1807)の『敵討義女英』ぎじよのはなぶさは、「黄表紙」らしい洒落や滑稽とは異なる敵討ちを題材とし、これが当たりとなり敵討物が流行し始めた。以後、寛政後半期から文化初年頃までの「黄表紙」は勧善懲悪のストーリーが主流となっていく。ストーリーが複雑になれば文章の分量が増え、5丁1冊で分冊していた「黄表紙」は製本の手間を省くため合冊されるようになった。この製本上の変化は文化初年頃(1804-1806)から進展し、「黄表紙」は「合巻」と呼ばれるようになる。

ストーリー主体になった「合巻」は、装幀面でも「読本」の影響で口絵を付すようになり、表紙も多色刷りの浮世絵を用いた刷付表紙になっていった。文化末年(1815-)頃からは登場人物に役者似顔を用いた作品が増え、表紙や挿絵を担当する浮世絵師が作品の人気を大きく左右するようになった。その頃から歌舞伎や浄瑠璃、「読本」に類する敵討物や御家騒動物が主流となり、「合巻」は上下2巻の6冊物の短編合巻が数多く生み出された。しかし、ストーリーが次第に膨張してくると、それでも分量に不足をきたし、文政7年(1824)に曲亭馬琴が『西遊記』を翻案した『金毘羅船利生』りしやうのともづな8編54巻(1824-1831)を著し、それを契機として「合巻」は読み切り短編物のみならず、複数年に渡って刊行される長編物も生み出されるようになった。複数年に渡る連載を要する長編物が出現し、それに伴って巻数も上下2巻6冊から上下2巻4冊へと変化していく。馬琴は他にも『水滸伝』を換骨奪胎した『傾城水滸伝』初-13編上100巻(1825-1835)など、中国小説を長編合巻に翻案していった。また、それに刺激を受けた柳亭種彦(1783-1842)は、『源氏物語』の翻案『修紫田舎源氏』38編152巻(1829-1842)を出版して特に婦女子に絶大な人気を博した。

こうして文政-天保(1818-1843)年間は合巻が爛熟していったが、これに冷や水を浴びせたのが天保

の改革であった。この改革は「合巻」の出版にも多大な影響をもたらし、弘化年間(1844-1847)には「合巻」の出版も激減する。そのほとんどが冷めた嘉永期(1848-1854)になると、また合巻の出版も活発になったが、新機軸は見られずいたずらに長編化し頹廃していった。この時期の作としては、蝦蟇の妖術で人気を博した美図垣笑顔(1789-1846)ほか作の『児雷也豪傑譚』43編(1839-1868)や『八犬伝』のリライト版の笠亭仙果(1804-1868)『犬の草紙』49編(1848-1867)、明治期まで続いた柳下亭種員(1807-1858)ほか作の『白縫譚』90編(1849-1885)などがあげられよう。

おおさかずき し てんのうほしかごと
17. 黒本・青本『大 盃 四天王星兜』 富川房信(生没未詳)画 3冊 刊年不明 913.57/72//H

富川房信は、異説もあるが西村重長(1693?-1756)の門人と言われ、通称山本九左衛門として江戸で地本問屋を営業し、後に作者として自作の黒本・青本などを数多く手がけた。本書の絵題簽は上冊は欠けているが、中・下冊には残存している。房信の作品は明和8(1771)年まで確認できるので、本作はそれ以前の刊行である。



17. 『大盃四天王星兜』



18. 『恋福引』



19. 『新版信玄一代記』

こいのふくびき
18. 黒本・青本『恋 福引』 鳥居清経(生没未詳)画 上下 安永元(1772)年刊 出版者不明 913.57/76//H

鳥居清経の青本である。刊年の安永元(1772)年は題簽の意匠による。本作は他に五島美術館「大東急記念文庫」蔵本が知られるのみで、極めての稀本である。清経は初代鳥居清満(1735-1785)の門人で、宝暦末期から安永(1760-1781)にかけて黒本や黄表紙など挿絵を多く手掛けた。

しんぱんしんげんいちだい き
19. 黒本・青本『新版信玄一代記』 作画者不明 合1冊 安永天明頃 鶴屋喜右衛門板 913.57/79//H

文学史的には黄表紙の初作は安永4(1775)年刊の『金々先生栄花夢』だが、それで「黒本・青本」が廃れたわけではなく、それ以後も武将の一代記といった、「黒本・青本」の色合いを残す数多く刊行されている。本作もその類いで、残存数の少ない作であり、題簽の家紋から鶴屋喜右衛門板と知られる。元来の5冊物が1冊に合冊された本書の題簽には手書きで「一二三」と記されている。おそらく、第2巻の題簽の巻数表記の左右に「一・三」を書き加えたものであろう。第5巻の絵題簽も残存している。なお、第4・5巻の絵題簽は都立中央図書館加賀文庫蔵本のデジタルデータで見ることができる。

きよもりいちだい き
20. 黄表紙『清盛一代記』 恋川春町(1744-1789)作・南喬斎(生没未詳)画 3冊 刊年不明 913.57/K01-1//H

『金々先生栄花夢』で知られる一世恋川春町の、古めかしいスタイルの黄表紙作品で、極めて珍しい。本書よりほかに伝本を聞かない。春町の同様の作としては、『為朝一代記』『楠一代記』『頼光山

入一代記』の三作が知られている。画工の「南喬斎」は未詳。上中下冊の絵題簽が残っている。下冊の絵題簽のみ役者似顔となっていて、二世関三十郎(1786-1839)かと思われる。その点から見て、文化初期(1804-08頃)以後の後刷本であろう。



20. 『清盛一代記』



21. 『新田義貞一代記』

21. 黄表紙 ^{につ た よしきだいちだい き} 『新田義貞一代記』 南仙笑楚満人(1749-1807)作／舎辰斎三蝶(生没未詳)画 5冊 刊年不明 伊勢屋治右衛門板 913.57/NA1-8//H

本作は、「敵討物」で人気を博した1世南仙笑楚満人の作で、「国書データベース」の検索ではヒットしない。稀本と言えるだろう。楚満人には『……一代記』と題した作が15作ほどあるが、本作もその一つと見られる。古風な黒本・青本風の武家一代記である。題簽が五卷分そろっている点も価値が高い。画工の舎辰斎は小網町に居住したことから古阿三蝶と称し、また、飛田琴太の名で天明期(1781-89)に黄表紙の自画作15作ほどが知られている。

22. 黄表紙 ^{かえりざき ご じつのはな} 『帰咲後日花』 北尾政演(1761-1816)作画 2冊 安永8(1779)年? 913.57/SA1-85//H

この北尾政演(山東京伝)の作は稀観本で、絵題簽を完備している点も貴重である。他の1本、東京都立中央図書館「加賀文庫」本は書き題簽の「昔嘶後日花」で登録されているが、本書の絵題簽「帰咲後日花」が正式書名である。本書は国書データベースに三冊本とされているが、二冊本が正しい。京伝の絵師北尾政演としての初作は安永7(1778)年刊『お花半七開帳利益札遊合』^{かいちようりやくのめくりあい}とされているので、本書は安永8(1779)年頃の刊行と見られ、政演のキャリア最初期に属する作として貴重である。



22. 『帰咲後日花』



23. 『廬生夢魂其前日』

23. 黄表紙『^{ろ せい が ゆ め その ぜん じつ}廬生夢魂其前日』 山東京伝(1761-1816)作／北尾重政(1739-1820)画 3冊 寛政3(1791)年刊 913.57/SA1-77//H

謡曲「邯鄲」の廬生に夢を見せるために、^{むちやら}夢茶羅国に住む夢達が道具立てを拵え、歌舞伎仕立てで練習をし、明日が本番ということになるという筋立てで、その途中で別人の夢を取り違える間違いなどの滑稽が挿入されている。『金々先生栄花夢』以来、黄表紙で使い古された夢という趣向を用いながらも、夢の生ずる過程を描くという意表を突く発想は、如何にも京伝らしい才気が横溢しており、この時期の京伝黄表紙の佳作と言えよう。本書には原表紙・原題簽と残存しているのが貴重である。

24. 黄表紙『^{こはめずらしい み せ もの が た り}這 奇的見勢物語』 山東京伝(1761-1816)／北尾重政(1739-1820)画 3冊 寛政13(1801)年刊 蔦屋重三郎板 913.57/SA1-79//H

寛政13(1801)年は2月5日に改元されて享和元年となった。題名は、見世物小屋の口上「こはめずらしい……」を用い、見世物を『伊勢物語』に掛けたもので、角書「昔男のいけどり」も、『伊勢物語』各段冒頭の「昔男ありけり」に見世物の「熊の生け捕り」などをこじつけたもの。各丁毎に見世物看板・看板絵を掲げ、それに附会した日常生活を描いて、人の心を絵解きした作である。京伝の寛政2(1790)年刊の『心学早染草』は、擬人化された善玉・悪玉が人の心を動かすという発想で好評を得たが、このような説明的な描き方は類型化されやすく、マンネリズムに堕しがちである。本作も京伝としてはさほど出来がよくない。



24. 『這 奇的見勢物語』



25. 『浪速秤華兄芬輪』

25. 黄表紙『^{なに わ ばかり う め の ふ り ん}浪速 秤 華兄芬輪』 曲亭馬琴(1767-1848)／栄松斎長喜(生没未詳)画 2冊 寛政13(1801)年刊 鶴屋喜右衛門板 913.57/TA1-64//H

題名は「難波の梅」伝説から発想されている。この伝説は、仁徳天皇が移植させた梅が故郷の難波の方角ばかりにしか咲かないので、元に戻すよう命じたところ、また花を咲かせるようになったというものである。馬琴はそこから発想して、「秤」に重量単位の「分厘」を、「梅」に「芬輪(芳しい花)」を掛けられている。馬琴の黄表紙のほとんどは、このような語呂合わせから生み出されている。寛政3(1791)年刊行の馬琴の黄表紙第1作『^{つかいはたして}尽 用 而 二分狂言』も、『冥途の飛脚』の「二十日あまりに四十両使い果たして二分残る」という、よく知られた詞章を、当時、江戸で流行した無言仮面劇の壬生狂言に付会したもの。馬琴はこのような知的な語呂合わせからしか黄表紙を発想できなかった。馬琴が本領を発揮し始めるのは、ストーリー重視の合巻・読本の時代になってからである。

26. 黄表紙『^{こくう た ろ う む し や し ゆ ぎ よ う ば な し}虚空 太郎 武者 修行 咄・^{こくう た ろ う お と と の あ だ う ち}虚空 太郎 舍弟 訾討』 南仙笑楚満人(1749-1807)作／歌川豊広(1774-1830)画 6冊 享和2(1802)年刊 和泉屋市兵衛板 913.57/NA1-9//H

書名は『虚空太郎武者修行咄』『虚空太郎舍弟訾討』と別だが、前後編の揃いなので、図書番号を一つにまとめてある。南仙笑楚満人は黄表紙作者としては滑稽や洒落の才能のない古めかしい作者だったが、寛政7(1795)年刊の敵討ちを題材とした『^{ぎ じ よ の は な ぶ さ}敵討義 女 英』が寛政の改革当時の時代風潮に合

致して大当たりとなり、敵討ちブームを引き起こした。なお、楚満人没後に2世南仙笑楚満人を称したのが、後の為永春水(1790-1844)である。



26. 『虚空太郎武者修行咄・虚空太郎舎弟警討』

27. 黄表紙『^{かたきうちばんしゆうさら や しき} 酬 寇播州 皿屋敷』 徳永素秋(生没未詳)作／歌川豊広(1774-1830)画 3巻 享和3(1803)年刊 出版者不明 913.57/T02-1//H

徳永素秋の知られている作は、この一作だけである。題名から知られるとおり、これはお菊の亡霊が井戸で夜な夜な「いちまい、にまい……」と皿を数える怪談「播州皿屋敷」を題材とした敵討ち物の黄表紙である。皿屋敷の説話は、寛保元(1742)年初演の為永太郎兵衛・浅田一鳥作の浄瑠璃『播州皿屋舗』で定型化され、読本や草双紙の題材としてもしばしば取り上げられた。山東京伝にも文化8(1811)年刊の合巻『播州皿屋敷物語』があり、曲亭馬琴にも文化11(1814)年刊の『皿屋敷浮名^{そめつけ}染著』がある。



27. 『酬寇播州皿屋敷』



28. 『敵討蟒蛇榎』

28. 黄表紙『^{かたきうちわば み えのき} 敵 討 蟒 蛇 榎』 南仙笑楚満人(1749-1807)作／歌川豊国(1769-1825)画 2冊 文化2(1805)年刊 西村屋与八板 913.57/NA1-5//H

楚満人の黄表紙初作は天明3(1783)年刊の『頼朝一代記』とされている。題名から察せられるとおり内容は古風な「青本」である。それ以来、58歳で没するまで楚満人には100作ほどの黄表紙があるが、その約8割が「敵討ち物」である。楚満人は寛政7(1795)年の『敵討^{ぎ じよのはなぶさ}義女 英』で大当たりを取ったものの、それ以前もそれ以後も、ただひたすら敵討ち物を綴り続けていたのである。本作の序者、四方真顔^{しかつべの}(鹿津部真顔：1753-1829)は「(楚満人は)山に里^{ほとん}に 殆 三十年青本作者の青大将と呼ばれしが」と言っている。確かに、これだけ十年一日の如く同工異曲の作品を作り続けられるのも、ある種の才能と言うべきだろう。「南仙笑楚満人遺稿」と銘打ち、京伝の序を付して読本『杣物語仙家花』が刊行されたのは、楚満人が死んだ翌年、文化5(1808)年のことであった。

29. 合巻『^{えきろのすずよさくがはるこま} 驛路鈴與作春駒』 曲亭馬琴(1767-1848)作／歌川国貞(1786-1865)画 2冊 文化11(1814)年刊 岩戸屋喜三郎板 913.57/TA1-69//H

本作は、馬琴が読本において先輩の山東京伝を次第に凌駕していく時期の合巻である。馬琴の本領は読本にあったが、当時の作者にとって合巻執筆は収入面で欠かせない仕事だった。特に原稿料で暮らしを立てていた馬琴にとって不可欠の仕事で、馬琴は短編長編合わせて100種近くの合巻をものしている。本書は、この時期の合巻としては刷付表紙の保存状態がよいのも貴重である。絵師の一世歌川国貞は文化年間から幕末期まで長きに渡って、浮世絵から挿絵まで膨大な量の作品を残し、3世豊

国を襲名して歌川派の総帥として勢力を振るった。



29. 『驛路鈴與作春駒』



30. 『伊達模様紅葉打懸』

30. 合巻『伊達模様紅葉打懸』^{だてもようもみじのうちかけ} 橋本徳瓶(1758-1825)作／勝川春扇(生没未詳)画 6冊 文化12(1815)年刊 森屋治兵衛板 913.57/HA2-2//H

既に合巻全盛の時代であるが、造本形態は黄表紙仕立てで、6冊に分冊されており、この時期まで黄表紙形態が残存していたことを例証する作である。絵題簽は前編上冊が欠けているが、後の5冊は絵題簽が残存しており、資料的に貴重である。絵題簽はこの時期流行の役者似顔が用いられている。推定だが、前編中＝7世市川團十郎、前編下＝5世松本幸四郎、後編上＝3世坂東三津五郎・2世沢村田之助、後編中＝5世岩井半四郎、後編下＝3世尾上菊五郎と見られる。

31. 合巻『草履打所縁色揚』^{ぞうりうちゆかりのいろあげ} 山東京伝(1761-1816)作／歌川美丸(1793-?)画 2冊 文化12(1815)年刊 戸屋喜三郎板 913.57/SA1-82//H

「草履打」は、敵役が善人を草履で打ち据えて辱めを与えるという趣向で、天明2(1782)年1月初演、容楊黛作の浄瑠璃『加々見山旧錦絵』^{かがみやまきしょうのにしきえ}に始まる。これは歌舞伎の人気演目となって、演劇種の合巻の趣向としてしばしば用いられた。この作の刊行された文化12年頃は、合巻に役者似顔を用いることが普通に行われるようになっており、この作でも登場人物に5世岩井半四郎、5世松本幸四郎、7世市川團十郎などが当てられている。合巻における役者似顔の使用は長く続いていくが、歌舞伎のスターシステムではストーリー展開が読めてしまう欠点があり、それが合巻のマンネリ化に拍車を掛けることにもなった。

32. 合巻『花盛雛献立』^{はなざかりひなのこんだて} 古今亭三鳥(生没未詳)作／歌川美丸(1793-?)画 3冊 文化13(1816)年 森屋治兵衛板 913.57/K02-1//H

作者の古今亭三鳥は浅草の薬種仲買商で、通称は三河屋吉兵衛。式亭三馬(1776-1822)に学び、文化3(1806)年の共作断本『江戸嬉笑』を初作として、文化年間(-1815)から文政12(1829)年に掛けて合巻を20作ほど書いた。



32. 『花盛雛献立』

ている。代表作と言うに足りるほどの作はない群小作家ではあるが、当時の戯作者の一員としてそれなりの活動をしたとは言えるだろう。

33. 合巻『^{はちまん たろういちだい き}八幡太郎一代記』 喜多川月麿(生没未詳)画 3冊 文化年間刊か? 森屋治兵衛板 913.57/68//H



33. 『八幡太郎一代記』

に手腕を発揮し、90作ほどに関わっている。中でも十返舎一九(1765-1831)とは関係が深かったらしく、一九の黄表紙・合巻・滑稽本など40作弱に筆を取っている。作風が変わってからは肉筆美人画にも健筆を振るった。

簡易な黄表紙体裁の装幀で、絵題簽に3世坂東三津五郎など当時の役者似顔が使われている。月麿画の合巻で「八幡太郎」の外題を持つ作は知られておらず、改題本かとも思われる。月麿は名前から知られるとおり喜多川歌麿(1753-1806)の門人で、月麿の名乗りは文化元(1804)年からとされている。浮世絵よりも戯作の挿絵

34. 合巻『^{とう か りゅうすい}桃花流水』 溪斎英泉(1791-1848)作画 5巻中3巻存 文政4(1821)年刊 鶴屋喜右衛門板 913.57/IK1-1//H

本作は一筆庵可候こと溪斎英泉の自作画である。英泉は絵師・画工として名高いが、戯作者としてもそれなりの活動をしている。本作は文政4年という時期においても、黄表紙風の「七小町盛衰記」という絵題簽を持っている点が珍しい。所蔵の知られている2本では、国立国会図書館本は刷り付け表紙の合巻体裁の2冊本、専修大学図書館本は無地表紙の2冊本である。明大本と国会本の先後は確言できないが、造本の簡易な専修大本はこれらより後のものであろう。



35. 『鶯塚梅の魁』

35. 合巻『^{うぐいすづかうめ さきがけ}鶯塚梅の魁』 松亭金水(1797-1863)作／二世歌川国政(1792-1857)・歌川芳玉(1836-1870)画 10冊 明治期(1868-1911)刊 恵比寿屋板 913.57/SH9-2//H

筆耕あがりの松亭金水は、見よう見まねで戯作者となった幕末期戯作者の代表格である。人情本を初めとして、読本・合巻・随筆・図会など数多くの作をなしたが、代表作と言うべきものはなく、その評価も芳しいものではない。その意味では、金水は幕末期戯作者の劣化過程を示す典型的な作者と言える。本作は本来、5編10巻からなる合巻で、初板は嘉永3・4(1850・1851)年刊、画工は初-6編が二世歌川国政、7-10編が歌川芳玉である。掲出本は明治期の再刷り本で、各編上下2冊の構成ではなく、1号-10号という表示になっているのが興味深い。

明治期戯作

「合巻」形式は明治時代(1868-1887)中頃くらいまでは存続し、「明治式合巻」とも呼ばれていたが、現在ではその定義を巡って議論がある。「合巻」は、明治維新後は新たな題材も登場したが、作品の内実は変化することなく、次第に新聞小説など他の読み物に押されて衰退し消滅していった。今回の展示では、そのわずかな例を示すに止まらざるを得ないが、その実例には触れてもらえるはずである。

36. 明治期戯作『澤村田之助 曙 草紙』 さわむらのすけあけぼのぞうし 岡本起泉(1853-1882)作／楊州周延(1838-1912)画 5冊 明治13(1880)年刊 綱島亀吉板 913.6/OK1-3//H

沢村田之助(3世、1845-1878)は幕末から明治にかけて活躍した歌舞伎役者で、嘉永2(1849)年に初舞台を踏み、16歳で立女方となって人気を集めたが、慶応初年に脱疽をわずらい両手両足を切断した。その後もなお舞台に立ちつづけたが、ついには発狂し明治11(1878)年7月7日に34歳で没した。本作は田之助が没した2年後に、その悲劇的な生涯を艶聞を交えて綴ったもので、田之助を主人公とする作品は、この作を先蹤として、矢田挿雲『澤村田之助』(1925)、林和「田之助色懺悔」(雑誌『早稲田文学』1926年10月号)などがある。

37. 明治期戯作『荒磯割烹 鯉魚腸』 あらいそりよう り こいのはらわた 久保田彦(1846-1898)作／守川周重(生没未詳)画 5編15冊 明治14(1881)年刊 堤吉兵衛板 913.6/KU1-1//H

副題を「八代目團十郎のはなし」とするおと、8代目市川團十郎(1823-1854)を主人公とする作品である。8代目は10歳で市川團十郎を襲名し、天保13(1842)年に父の7代目が江戸追放になると、16歳で市川宗家として歌舞伎界を背負って立たねばならなかった。その人気はすさまじく、「助六」では8代目が身を沈めた桶の水が販売され、飛ぶように売れたと言う。嘉永7(1854)4年7月に、芝居に出ていた父を訪ねて大坂に赴いたが、初日に突如自殺した。享年32。8代目の死を題材とする「死絵」は300種も出たと言われる。



37. 『荒磯割烹鯉魚腸』袋

38. 明治期戯作『霜夜鐘十時辻筈』 しもよのかねじゅうじのつじうら 武田交來(?-1882)作／月岡芳年(1839-1892)画 5編15冊 明治14(1881)年刊 錦寿堂板 913.6/TA1-1//H

明治13(1880)年6月、新富座初演の河竹黙阿弥作『霜夜鐘十字辻筈』全5幕を読み物にした作品である。士族の六浦正三郎は天下のためと恩師を討ったが、妻に自殺され乳呑児を抱えて苦勞することと



38. 『霜夜鐘十時辻』袋

郎兵衛と喜多八に倣って、曾松屋面次郎と食客図留七が明治の御代の旅で繰り広げる滑稽を描いた作品である。画工の吟光は浮世絵・挿絵など様々な領域で活躍した絵師で、その作画期は明治3-33(1870-1900)年頃である。この作では表紙に登場人物の顔が大きく描かれているのが目新しい感じの構図となっている。

なり、それを助けてくれた巡査が恩師の子息と知って、討たれようとするが、和解して剃髪するというのが大筋になっている。もともとは、明治12(1879)年に『歌舞伎新報』に連載された脚本形式の読み物で、誌上に戯曲が発表される先駆けとなったものである。これが好評を博したため、のちに内容をまとめたものがいくつか出版されたが、本書は其中で草双紙スタイルの1例である。

39. 明治期戯作『昇平鼓腹三府膝栗毛』
松村桜雨(生没未詳)著／松斎吟光(生没未詳)画 9冊 明治14(1881)年刊 島鮮堂板 913.6/MA1-1//H

この作は、十返舎一九(1765-1831)の『東海道中膝栗毛』に端を発する「膝栗毛物」の明治期における1例である。原作の弥次

40. 明治期戯作『民権泰斗／板垣君近世紀聞』 中島市平(生没未詳)編／二世歌川国政(1792-1857)画
3編9冊 明治15(1882)年刊 辻岡文助板 913.6/NA1-1//H

明治15(1882)年4月6日の板垣退助暗殺未遂事件を事件直後に読み物とした作である。作者の中島市平は、仮名垣魯文主筆の『仮名読新聞』(1875年11月1日創刊)で、仮編輯長や印刷長などを務めた人物。柳田泉『政治小説研究』は「政治小説以前の政治的文学」の一種として「時事文学」という概念を提唱し、その一例として本作を取り上げている。中島市平は、本作のほかに主立った作はないが、筆者としての仕事に『改進黨員／政談演説傍聴筆記』第2号(秩山堂 1882年5月)がある。これは中島に自由民権運動への関心があったことを示している。柳田が言うように、キワモノ的な読み物作者も政治意識を持ち始めていた一例と考えられよう。



40. 『民権泰斗／板垣君近世紀聞』2編表紙

読 本

「読本」は大きく前期読本(上方読本)と後期読本(江戸読本)に分かれる。前期読本は中国の俗語で書かれた白話小説の影響を受けて生まれた。当初、白話小説は中国語学習の教材として導入されたが、やがて新しい読み物として受け入れられるようになり、訓読本も刊行されるようになった。そして、白話小説を種本とする創作も生み出されてきた。その嚆矢が都賀庭鐘(1718-1794?)の寛延2(1749)年刊『英草紙』5巻5冊である。以後、安永2(1773)年刊の建部綾足(1719-1774)『本朝水滸伝』前編10巻(後編15巻は写本で未完)、安永5(1776)年刊の上田秋成(1734-1809)『雨月物語』5巻5冊などが現れた。

その文化現象は江戸へも流れ込んできた。江戸における「読本」受容に先鞭を付けたのが、寛政11(1779)年刊の山東京伝(1761-1816)『忠臣水滸伝』前編5巻(後編享和元(1801)年刊)である。これは『水滸伝』に「忠臣蔵」を撮合した作で、「読本」においても京伝が江戸戯作界をリードしたのである。また、この時期は、寛政の改革によって「黄表紙」や「洒落本」はその内容の変更を余儀なくされ、浄瑠璃や歌舞伎などに取材したストーリー性重視の作品が主流となった。その時流の中で「読本」がブームとなり、新作の出版点数も爆発的に増え、文化5、6(1808-1809)年頃には最高潮を迎えた。

その中で頭角を現したのが曲亭馬琴(1767-1848)である。軽妙洒脱な「黄表紙」には不向きな性格だった馬琴は、「読本」に本領を見だし、次々に作品を生み出して、文化中期以降は京伝を凌駕していく。馬琴の「読本」は40種に及び、その代表作としては『椿説弓張月』全5編29冊(1807-1811)、『南総里見八犬伝』全98巻106冊(1814-1842)がよく知られている。特に後者は28年を掛けて完成された畢生の大作であり、『水滸伝』の日本化を目指した読本の到達点と言える作品である。

文化前半期に大流行した「読本」も次第に沈滞していき、特に天保の改革以降は、他の江戸文芸同様に衰退し始めた。明治期に入ると、「読本」は新聞雑誌などの新しいメディアにおける読み物に席を譲り、ジャンルとしては消滅する。坪内逍遙(1859-1935)は、明治18(1885)年の『小説神髓』の中で、「読本」に代表される旧時代の文学を「しひて勸善の主旨を加へて人情をまげ、世態をたわめて無理なる脚色をなす」ものとして強く否定した。その逍遙のすすめで二葉亭四迷(1864-1909)が『浮雲』を発表したのは明治20(1887)年のことである。この意味において、「読本」は日本の近代小説のスプリングボードとしての役割を果たしたとは言えるだろう。

41. 読本『しみのすみか物語』 ^{ものがたり} 石川雅望(1754-1830)作／司馬綴(生没未詳)画 2冊 文化2(1805)年刊 永楽屋東四郎板 913.56/IS1-2//H

本作は中国や日本の笑話集から材を得た54話を『宇治拾遺物語』風の文体で書いた作で、読本というよりも擬古文による笑話集である。石川雅望は、浮世絵師石川豊信(1711-1785)の子で、狂歌師宿屋飯盛として活躍し、^{しかつべのまがお}鹿都部真顔・^{ぜにやのきんらち}銭屋金埒・^{つむりひかる}頭光とともに狂歌四天王と称された。狂歌のほか、読本・和文・国学など多方面で著作を残した。読本には『飛驒匠物語』6巻6冊(1808)、『近江県物語』5巻5冊(1808)がある。国学方面の仕事としては、雅語用例集『雅言集覧』、『源氏物語』注釈書の『源註余滴』がある。

42. 読本『情花奇語奴の小まん』 ^{じょうかきこやつこ} 柳亭種彦(1783-1842)作／優遊斎桃川(生没未詳)画 8冊 刊年不明 河内屋藤兵衛板 913.57/RY1-55//H

初刊本は中本型で、前編が文化4(1807)年、後編が同5(1808)年の刊行である。本書は半紙本型の後刷り本だが、前後編8冊が揃っている本は少ない。柳亭種彦の読本第1作で、まだ生硬な点もあるが、比較的知られた作であり、近代の活字本も何種類か出ている。「奴の小まん」は当時よく知られた女侠

客で、諸書に登場する。



42. 『情花奇語奴の小まん』



43. 『松染情史秋七草』

43. 読本『^{しょうせんじょう し あきのななくさ}松染情史秋七草』 曲亭馬琴(1767-1848)／歌川豊国(1769-1825)画 6冊 文化6(1809)年刊 西村源六板 913.57/TA1-58//H

馬琴の「巷談情話物」と呼ばれる作品は、心中事件で知られる主人公を勧善懲悪の枠組みに嵌め込み、忠義の人物に翻案し直した作品群である。数え方にも拠るが、半紙本型読本としては8作ほどあり、本作は「お染久松」を題材としている。他には、「三勝半七」の『三七全伝南柯夢^{なんかのゆめ}』6巻7冊、「お俊伝兵衛」の『旬殿実々記』前後編12巻12冊などがある。文化5-9(1808-1812)年頃に多く生み出されており、馬琴読本の一つの典型をなしている。

44. 読本『^{ぜんあくいん がきょうわ だんず え}善悪因果経和談図会』 松亭金水(1797-1863)釈 6冊 江戸後期刊 913.54/SH1-5//H

「図会」という書名は、『和漢三才図会』や『東海道名所図会』のような辞典や地誌の類のほか、挿絵入りの書籍全般に用いられる。山東京伝と曲亭馬琴以降、江戸を中心に栄えた後期読本の中にも「図会物」と呼ばれる一類がある。武将・宗祖・お経などを題材とするものが多く、本作は『善悪因果経』を一般向けに平易に説いた作品である。何でも屋の金水は他に『日蓮上人一代図会』6巻6冊(1856)も書いている。



44. 『善悪因果経和談図会』挿絵

滑稽本

「滑稽本」は、寛政の改革を期として前期滑稽本と後期滑稽本と分けられる。前期は、宝暦2(1752)年の^{じようかんぼう}静観房好阿『^{いまいちやう}当世下手談義』に始まる。江戸の風俗を皮肉った、この作は大いに受け、『教訓雑長持』『返答下手談義』『評判当風辻談義』など多数の後続作が現れた。これらは「談義本」と呼ばれるが、その名の通り教訓性が強く、小説的要素はまだ希薄だった。そこに風来山人(平賀源内、1728-1780)が現れ、『根南志具佐』(1763)、『風流志道軒伝』(1763)で一世を風靡した。その影響は大きかったが、寛政の改革の禁制によって風刺の要素は影を潜めざるをえず、以後は滑稽に特化した小説に転化していく。

滑稽主体の後期滑稽本は、享和2(1802)年刊の十返舎一九(1765-1831)『東海道中膝栗毛』初編に始まる。この作は会話を主とする「洒落本」の流れを受け、弥次郎兵衛・喜多八の道中の滑稽や写生の妙によって爆発的な人気を博し、一九自身による続編が次々に書かれ、また、『何々膝栗毛』『何々道中』といった模倣作も陸続と生み出された。

式亭三馬(1776-1822)は、会話体を生かした文化6(1809)年刊の『浮世風呂』初編で現実模写の妙を見せ、以後も『浮世床』^{なまえいかたぎ}『^{なまえいかたぎ}酩酊気質』^{なまえいかたぎ}『^{なまえいかたぎ}四十八癖』^{なまえいかたぎ}『^{なまえいかたぎ}客者評判記』などで人間の性格類型を描き出した。後期滑稽本は文化文政期(1804-1830)に盛んとなり、その後、^{りゆうていりじよう}滝亭鯉丈(?~1841)『^{りゆうていりじよう}花暦八笑人』(1820)、梅亭金鷲(1821-1893)『^{りゆうていりじよう}七偏人』(1857)なども出た。これらの作は面白おかしくはあるが、一九や三馬にあった写実性を失って、現実との接点のない空虚な作品となってしまっている。

明治になってからは、仮名垣魯文(1829-1894)が『西洋道中膝栗毛』初編(1870)、^{あぐらなべ}『^{あぐらなべ}安愚楽鍋』初編(1871)などで文明開化の世相を描き出したが、新聞雑誌などの新たなメディアの登場とともに、江戸以来の「滑稽本」は姿を消した。

展示品は、「滑稽本」の史的展開を全般的に跡づけるものではないが、雑多な要素を含む「滑稽本」の諸相を見てもらえるものと思う。

45. 滑稽本『^{えてかつて}得手勝手』 浪華散人魯佛(未詳)作 1冊 安永9(1780)年成 913.55/NA1-1//H

魯佛はこの作品しか知られていない作者である。刊記はないが、序末と最終丁に「安永九年庚子春」とあるので成立時期が知られる。序文では「今世の中にスイといふことあり。惟ふに人情世態によく通じて純粹せるものをいへるにや。または当時の流行に速くうつり、よろづに新古の境を弁へるをいへるや」とあり、本文冒頭は「芝居を好んで、^{われ}吾通なり思ふ者三人有。一人を推といひ、今一人をば酔と呼び、今一人を粹と云」とあって、芝居をめぐる「通」「粹」の論である。これは洒落本の主要テーマであったが、本作は遊里ではなく芝居を題材としているため滑稽本に分類されている。しかし、おおもとの発想は洒落本と基盤を同じくしている。所蔵館の少ない本で、知られるのは日比谷加賀文庫・東大霞亭文庫など4、5件に過ぎない。

46. 滑稽本『^{じんえんちやがけもの}人遠茶懸物』 芝甘交(?-1804)作 1冊 天明6(1786)年刊 鶴屋喜右衛門板 913.53/SH 3-1//H

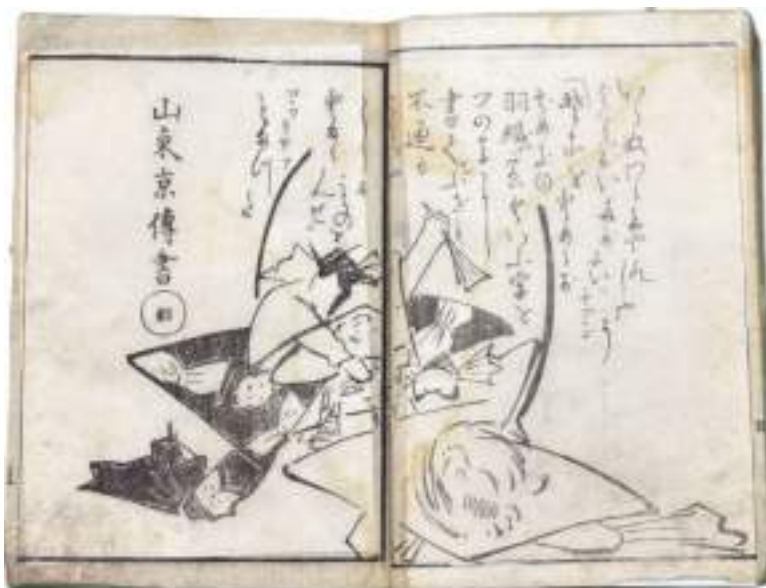
本作は別名を「ひとをちやがけもの」と言う。題名は「人を茶にする(からかう・馬鹿にする)」の成句に茶室の掛け軸「茶掛け」を引っかけたもの。夙に翻刻されて世に知られてはいるが、原本自体は数が少ない。作者の芝甘交は、初代芝全交(1750-1793)の門人で、本名は大伴寛十郎、一払斎とも称した。本作には四方赤良・山東京伝などが賛を寄せているから、甘交も天明狂歌ムーブメントの一員だったのであろう。また、甘交は、本作を出した天明6(1786)年に限って、黄表紙『道笑双六』『現金青本之通』『大々太平記』の3作をなしているが、それ以外に作はない。

じよさいのないばけものがたり
47. 滑稽本『無如在怪談』 五返舎半九(生没未詳)作 1冊 文化14(1817)年刊 森屋治兵衛板 913.
 55/G02-1//H

伝本はこの一本のみかと思われる。表紙に「丑初春」とあり、表紙見返しにも「文化十四／丁丑初春」とあるので、文化14(1817)年正月刊と知られる。表紙の役者似顔絵は、この頃から頭角を現し始めた7代目市川團十郎(1791-1859)である。本書の後刷りと思われるものに国立国会図書館本の『百物語化者狂言』(書き題籤)がある。作者の五返舎半九は、その名から見て十返舎一九の門人もしくは追随者だったらしい。知られている作品はごくわずかだが、主に咄本の作者として活動したようである。



45. 『得手勝手』 序文末



46. 『人遠茶懸物』 挿絵



47. 『無如在怪談』

2005-2024年度：「江戸文藝文庫」収蔵書一覧

	書名	分野	図書番号
ア	赤ぼしさうし	読本	913.56/AK2-1//H
	赤松満祐梅白旗	明治戯作	913.6/TA1-3//H
	朝夷巡島記	読本	913.56/TA1-29//H
	足手書草紙画賦	黄表紙	913.56/TA1-28//H
	綾重衣紋廻春秋	明治戯作	913.6/IT1-1//H
	綾重衣紋廻春秋	明治戯作	913.6/IT1-1/B/H
	荒磯割烹鯉魚腸	明治戯作	913.6/KU1-1//H
	新玉艸紙	黄表紙	913.57/81//H
	石場図	掛軸	099.4/137//H
	犬のさうし鶯梅双六	双六	798/12//H
	今常盤布施譚	明治戯作	913.6/SH1-1//H
	芋太郎屈日記咄	黄表紙	913.55/KO3-1//H
	鶯塚梅の魁	合巻	913.57/SH9-2//H
	驛路鈴與作春駒	合巻	913.57/TA1-69//H
	得手勝手	滑稽本	913.55/NA1-1//H
	江都錦今様国盡：児童怪力矢矧牛若丸	錦絵	721.8/235//H
	繪本報仇安達原	読本	913.56/BU1-1//H
	繪本復仇英雄録	絵本	913.56/MI1-1//H
	絵本實七種	絵本	913.53/SA1-7//H
	繪本二島英勇記	読本	913.56/HI1-1//H
	繪本ふちはかま	絵本	913.56/SA4-2//H
	繪本夜船譚	読本	913.56/HA1-2//H
	大中黒本種	黄表紙	913.57/70//H
	大盃四天王星兜	黒本	913.57/72//H
	男達東錦絵	黄表紙	913.57/JI1-17//H
	朧気物語・後編	人情本	913.53/HA1-2//H
	親鸞勝膏藥	黄表紙	913.57/SH1-21//H
	御詠染長壽小紋	黄表紙	913.57/SA1-81//H
	女丹前	合巻	913.54/UT1-2//H
カ	怪談摸摸夢字彙・化物虚字之部	黄表紙	913.57/SA1-80//H
	帰咲後日花	黄表紙	913.57/SA1-85//H
	隠蓑笠図	掛軸	099.4/139//H
	敵討蟒蛇榎	黄表紙	913.57/NA1-5//H
	報仇奇説 響数千里虎尾峠	合巻	913.57/KA4-1//H
	敵討猫魔屋敷	中型読本	913.56/SH1-4//H
	酬寇播州皿屋敷	黄表紙	913.57/TO2-1//H
	敵討柳四郎兵衛	黄表紙	913.57/NA1-6//H
	刀屋半七浮名仇討 松之月新刀明鑑	合巻	913.56/TA1-32//H
	雅仏小夜嵐	洒落本	913.53/SO1-1//H
	亀田鵬斎先生書	法帖	728.21/17//H
	勧善浮世車	合巻	913.57/SH9-1//H
	菊水物語	黄表紙	913.57/EI1-1//H
	山東京伝・京山狂歌短冊	短冊軸装	099.4/144//H
	山東京伝発句短冊	短冊軸装	099.4/145//H
	曲亭一風京伝張	黄表紙	913.57/TA1-62//H
	清盛一代記	黄表紙	913.57/KO1-1//H
	巾着図扇面	扇面	099.4/142//H
	口豆飯茶番樂屋	合巻	913.55/SA4-1//H
	雲霧五人男全傳	明治戯作	913.7/40//H
	戯作六家撰	写本	913.5/141//H
	月氷奇縁 5巻	読本	913.57/TA1-57//H
	玄同放言	随筆	914.5/TA1-1//H
	恋福引	青本	913.57/76//H
	恋渡操八橋	合巻	913.57/SH2-2//H
	購入和書覺帳ほか8点	水野稔先生資料	910.25/169//H
	虚空太郎武者修行咄・虚空太郎舎弟讐討	黄表紙	913.57/NA1-9//H
	御存高麗屋傳：夫色更是喰更	黄表紙	913.57/SA6-1//H
	五体和合談	黄表紙	913.57/SA1-78//H
	滑稽江戸久居計	滑稽本	913.55/GA3-1//H
	滑稽笑談清佛船栗毛	明治戯作	913.6/IT1-4//H
	滑稽笑談清佛船栗毛	明治戯作	913.6/IT1-5//H
	小鍋丸手石入船	合巻	913.57/TA1-65//H
	這奇の見勢物語	黄表紙	913.57/SA1-79//H
サ	北廓花盛紫	合巻	913.6/SH3-1//H
	澤村田之助曙草紙	明治戯作	913.6/OK1-3//H
	山東滑稽文選	滑稽本	913.53/SA1-5//H

	地神五代記	黄表紙	913.57/JI1-19//H
	四遍摺心学草紙	黄表紙	913.57/TA1-60//H
	島田一郎梅雨日記	明治戯作	913.6/OK1-2//H
	しみのすみか物語	読本	913.56/IS1-2//H
	霜夜鐘十時辻筈	明治戯作	913.6/TA1-1//H
	十二神楽稚軽業	黄表紙	913.57/H01-1//H
	情花奇語奴の小まん	読本	913.57/RY1-55//H
	松染情史秋七草 5巻	読本	913.57/TA1-58//H
	正札附辨天小僧	明治戯作	913.6/IT1-3//H
	昇平鼓腹三府膝栗毛	明治戯作	913.6/MA1-1//H
	無如在怪談	滑稽本	913.55/G02-1//H
	白縫譚（柳下亭種員自筆草稿本）	自筆稿本	913.57/RY3-6//H
	素後壮雪信	黄表紙	913.57/SH7-1//H
	新靱田舎物語	合巻	913.57/SA4-2//H
	人遠茶懸物	滑稽本	913.53/SH3-1//H
	新版 信玄一代記	青本	913.57/79//H
	新説暁天星五郎	明治戯作	913.7/26/B/H
	新富座俳優評判記ほか9種	役者評判記	774.28/218//Hほか
	新板替道中助六	黄表紙	913.53/SA1-6//H
	雪月花三遊新話	明治戯作	913.6/SH2-1//H
	殺生石後日怪談	合巻	913.57/TA1-70//H
	善悪因果経和談図会	仏教	913.54/SH1-5//H
	草紙合高評双六	双六	798/11//H
	草履打所縁色揚	合巻	913.57/SA1-82//H
	其俤登之碑	合巻	913.57/SH8-1//H
タ	高尾年代記	随筆	913.57/RY1-53//H
	伊達模様紅葉打懸	合巻	913.57/HA2-2//H
	煙草二抄	滑稽本	913.57/69//H
	忠臣房受帖	黄表紙	913.57/JI1-18//H
	著作堂一夕話	随筆	913.57/TA1-59//H
	千代曩媛七變化物語	読本	913.56/SH1-3//H
	月と泥亀図扇面	扇面軸装	099.4/140//H
	月都大内鏡	合巻	913.56/TA1-31//H
	桃花流水	合巻	913.57/IK1-1//H
	唐犬軍兵衛伴推蝶兵衛三人若衆獨權八	合巻	913.57/T01-3//H
	綴合於伝仮名書	明治戯作	913.6/TA1-4//H
	綴合於傳假名書	明治戯作	913.6/SH2-2//H
ナ	夏乃富士	役者絵本	913.57/SA2-19//H
	浪速秤華兄芬輪	黄表紙	913.57/TA1-64//H
	新田義貞一代記	黄表紙	913.57/NA1-8//H
	人間万事心意気	人情本	913.54/HA1-7//H
	人情腹之巻	人情本	913.54/HA1-8//H
	猫奴牝忠義合奏	合巻	913.56/TA1-30//H
ハ	俳諧用捨箱	随筆	913.57/RY1-54//H
	馬琴著作當雙六	双六	798/15//H
	化競刃満鐘	浄瑠璃	912.4/TA2-1//H
	八幡太郎一代記	合巻	913.57/68//H
	花盛雛献立	合巻	913.57/K02-1//H
	花相撲源氏張膽ほか74冊	脚本	774.4/58//Hほか
	花封蒼玉章	合巻	913.57/SA3-1//H
	花洛中山城名所	明治戯作	913.6/TA1-2//H
	彼岸桜勝花談義	黄表紙	913.57/TA1-61//H
	平仮名銭神問答	黄表紙	913.57/SA1-86//H
	ふうじぶみ恵方吉書始	合巻	913.57/SA2-18//H
	笛竹隅田川	青本	913.57/75//H
	北国順禮縁起	黄表紙	913.57/TA1-67//H
	梵鐘図扇面	扇面額装	099.4/141//H
	本町小西屋政談	明治戯作	913.7/39//H
マ	籬の菊操鏡	明治戯作	913.6/HA1-1//H
	先開梅赤本	黄表紙	913.57/SA1-83//H
	奈株木三階奇談	黄表紙	913.57/TA1-68//H
	万字屋玉桐とうらうの番付	合巻	913.57/SH1-22//H
	水野先生旧蔵デジタル資料9点	デジタル資料	AV/D-185//H
	名代振袖	黄表紙	913.57/NA4-1//H
	民権泰斗板垣君近世紀聞	明治戯作	913.6/NA1-1//H
	むかしむかし岡崎女郎衆	黄表紙	913.57/IC2-1//H
	席簾群馬嘶	明治戯作	913.6/SA1-1//H
	娘敵討扇銀面	黄表紙	913.57/NA1-7//H
	夢想兵衛勘略枕	合巻	913.57/RY2-11//H

	名画寫本名木奇特夢合返魂香	合巻	913.57/SH6-2//H
	餅菓子手製集	滑稽本	588.36/10//H
ヤ	矢指浦	合巻	913.57/JI1-16//H
	倭洋妾横濱美談	明治戯作	913.6/TA1-5//H
	遊客図	掛軸	099.4/138//H
	遊客図扇面	扇面	099.4/143//H
	吉原細見	細見	384.9/64//H
	吉原細見	細見	384.9/65//H
	吉原細見	細見	384.9/66//H
	吉原細見	細見	384.9/67//H
	吉原細見	細見	384.9/68//H
	吉原細見	細見	384.9/69//H
	吉原細見	細見	384.9/70//H
	吉原細見	細見	384.9/71//H
	吉原細見	細見	384.9/72//H
	吉原細見	細見	384.9/73//H
	吉原細見	細見	384.9/74//H
	吉原細見	細見	384.9/63//H
	吉原大全	洒落本	913.53/K01-1//H
	北廓内所図会	洒落本	913.55/K02-1//H
	世諺口紺屋雛形	黄表紙	913.57/TA1-66//H
	讀と歌通の一字	黄表紙	913.57/AR1-1//H
ウ	頼豪阿闍梨怪鼠伝	読本	913.57/TA1-56//H
	頼光太平礎	黄表紙	913.57/71//H
	柳髮新話浮世床	滑稽本	913.55/SH1-9//H
	両面摺娘年代記	合巻	913.57/SA2-20//H
	礼者集	黄表紙	913.57/SA1-84//H
	廬生夢魂其前日	黄表紙	913.57/SA1-77//H
	六冊懸徳用草紙	黄表紙	913.57/TA1-63//H

参考資料

◎図書館紀要

- 「江戸文藝文庫」の創設に寄せて 『図書の譜』 5 (2001/3)
「江戸文藝文庫」蔵書解題1～6 『図書の譜』 6～12 (2002/3～2008/3)
「江戸文藝文庫」新収書目一覧(2005～2023年度) 『図書の譜』 12～29 (2008/3～2025/2 隔年)
《江戸文藝文庫》展について一覚書風に― 『図書の譜』 13 (2009/3)
山東京伝資料の寄贈について―水野稔先生旧蔵資料― 『図書の譜』 22 (2018/3)
水野稔先生関係資料の寄贈について 『図書の譜』 24 (2020/3)

◎企画展パンフレット

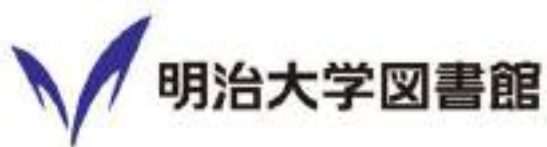
- 第28回《江戸文藝文庫》展―戯作の諸相― (2008/10/17～11/18、12/18～2009/1/31)
第77回「江戸文藝文庫」展―水野稔先生の学徳を偲んで― (2018/6/1～7/11)

◎単行書

- 水野稔遺文集『江戸文芸とともに』 ペリかん社 (2002/8)
水野稔『購入和書覚帖』 私家版 (2019/8/19)

*付記

展示パネル・パンフレットは、監修者の内村和至が執筆した。そのため、記事に『図書の譜』および第28・77回の企画展における内村の既発表原稿と重複する箇所がある。また、資料確認・写真撮影・校正については、図書館総務事務室「江戸文藝文庫」担当職員・ギャラリー担当職員各氏の協力を得た。記して鳴謝します。



第97回 明治大学中央図書館ギャラリー展示

「江戸文藝文庫」展

—菟書開始20周年記念—

編集：中央図書館ギャラリーワーキンググループ

監修：内村和至(文学部教授)

発行：明治大学図書館

発行日：2026年1月16日